
隠人（おに）使い< 3 >

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隠人^{おに}使い<3>

【Nコード】

N4690N

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

安倍晴明の血をひく土御門 綾。父の命に従い『東の京^{みやこ}』を守護するため、東京の高校に入った。そこで出逢ったのは自分とは正反對の性格を持つ、藤宮 望。そんな2人の前に『ナイト・メア』という闇の者が現世^{うつしよ}へと降臨する。

参(前書き)

眠いです。。。

それから1週間後、井上 遙は野球部のマネージャーになっていた。

「あれ？」

たまたまグラウンドを通っていた望は、ベンチから声援を送る女子たちの中に彼女の姿を見つけ、

「井上。お前、帰宅部じゃなかったの？」

彼女に近づき、声をかけた。

「うん。」

遙は嬉しそうに、「あんま帰宅部だけじゃ面白くないでしょ？だから、マネージャーに空きがあるっていうから、野球部に入ったの。」

「へえ。」

望は微笑んだ。「いいじゃん、それ。」

「それとね、藤宮くん。」

と、彼の制服の袖を引っ張り、望の耳に囁く。「私、彼氏出来ちゃった。」

「はい？」

望は余計目を丸くした。「井上に彼氏？」

遙はどちらかという大勢の中では引きこもりがちで、しかしルックスは某アイドルに似ていた。性格は真面目で成績もTOPクラス。だが遙の性格上、とても彼氏が出来るとは、望には信じられない所があった。

「マジ？」

「マジ。」

遙は微笑み、ベンチの傍らに置いてあった携帯を手に取る。「毎日、メール来るんだ。でね、この野球部のマネージャーも彼がやってみないか、って誘ってくれたの。」

「そう。」
「うん、だからもうあの校門で彼を待たなくてもいいんだよ。」
「そう言う彼女の目は輝いていた。性格も一転し、元々明るい方だったけど、それ以上に活発的になっていた。」

「井上 遥？」

綾は怪訝そうに、「誰だっけ。」

「もう、綾ったら！」

剣道部の練習が終わった後、一緒に綾のマンションへ来ていた望は、大きな溜息を付いた。

「そりゃ、綾が他人に興味が無い、っていうの知ってるけど、元クラス・メイトの事くらい覚えとけよ。」

「そう言われた綾は目を細め、」

「井上 遥。」

「そう呟き、やがて、「ああ……去年の夏の期末試験で俺を抜いてTOPに立った奴か。」

「また、そういう覚え方する。」

望はへこたれて、綾のベッドの黒いクッションに顔を埋めた。「確かに成績良かったよ、学級長もやったし。でも、それ以上に面倒見のいい子、とか少し引つ込み思案な所があるけどいい子、とか色々インパクトあった子じゃん。」

「そうだったっけ。」

綾は平然と答えた。

時刻は夕食時。望は手製のカレーを作り、今はそれを煮込んでいる最中である。

「もうじき出来る事だろう。」

「しかし」

綾は言った。「何でそんな話、俺にするんだ？」

「何となく。」

秘密が嫌いな望は親しい友人とは結構、この手の話とかもしてし

まう。

だからといって、口が軽い方ではない。それは、綾も承知していた。

「………つてか。」

そろそろ煮込み終わるであろうカレーの事を頭の中に描きつつ、「先刻から何で携帯ぱちぱちやってんの？」

確かに、綾は携帯から目を離そうとはしない。

「どっかで」

一端、その指を止め、「俺のメル・アドが流れたらしい。ずっとメールの削除してるだけ。」

「綾にメール？どれどれ？」

望はベッドに座る隣の綾の手元を覗き込んだ。

『入学した時から好きです。』

『阿倍晴明の末裔って本当ですか？私の将来を占って欲しいんですけど。』

『剣道部やめて、応援団部に入りませんか？。』

『歴史の勉強を教えてください。』

「………成程ね。」

望は溜息をついた。「『削除』の気持ちがよく判る。携帯鳴っても出ない方だろう？綾。」

「お前以外はな。」

ぱちっ、と携帯をたたみ折る。「毎日こんなメール来るんだよ。メル・アド変えようと思ってる。」

「その方がいいかもね。」

望は頷き、「じゃ、俺カレー見てくるよ。」

そう言い残すとキッチンへと向かった。

携帯メールに取りつかれている人がもう一人いた。

井上 遥である。

部活が終わり家に帰ると2階の自室に飛び込み、ついでにベッド

へも飛び込む。そして、携帯を眺める。

『君が側にいると楽しいよ。』

「やったー！」

制服姿のまま、遙は喜んだ。「やっぱ部活に入った甲斐があったわ！レスしなくっちゃ。」

ぶちぶちつと、携帯のボタンを押す。

「私も・・・と。」

そして、送信。

「あの夢ってやっぱ正夢だったのかな？」

遙はうつ伏せになり、ピンクの枕に顔を埋めた。「知らない女の人と契約・・・でも、何の契約かは判らないけど」

と、暫く考え、「飯田先輩と一緒になる事が契約とかいうのかしら？」

胸を弾ませながら、彼女は思った。

「まだ、メールのやりとりだけで喋った事なんて部活の最中にちよこつとただけけど・・・」

そして、再び天井へと視線を戻し身を転がす。「もしかして、両想いだっただの？んー、でもそれはありえないし」

髪を束ねていた白いシュシュを取りながら、

「ま、何でもいいや！飯田先輩が気付いてくれていれば。」

体を勢い良く起こし、「何かあったら、土御門君に相談すれば、それで済む事だし。」

うん、うんと自分で頷く。

「遙、ご飯よ！」

階下からいつもの通り、母の声が聞こえて来た。

「はい、今行く！」

遙は素早く制服からGパン姿へと着替え、階下へと向かった。「今日も勉強あるから、しっかり食べなくちゃ！」

そんな様子を。

遙の部屋の窓から、一羽のカラスが見つめていた。

参(後書き)

次の更新は少々遅れます(一¥)。。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4690n/>

隠人（おに）使い < 3 >

2010年10月8日23時54分発行